

海洋機構

東アジア 過去30年 晴天頻度が増加

豪雨 要因 巨大積乱雲出現も増加

気候の予測に最も大きな不確実性をもたらす要因に「雲」があるといわれ、その長期的な変化を明らかにすることが予測のカギを握るという。

海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター水循環変動予測プログラムの安成哲三プログラムディレクターらの研究グループは、過去約30年にわたる

気象台職員による雲の目視観測データを解析。東アジアでは、晴天の頻度が増加する一方で、豪雨をもたらす巨大積乱雲の出現頻度も

増えることを明らかにした。

1971年から96年の夏季の中国本土で晴天の頻度が増加、積雲の出現頻度が減少した。また中国南部では、積乱雲の出現が減少している。ところが、同地域で積乱雲が出現したときの雲量は逆に増加し、しかも出現した場合、発達する傾向が強くなり、豪雨をもたらしやすいことがわかったという。

今回の成果は、東アジアにおけるエアロゾルの増加や土地利用改変などに関連した水循環過程の変化に新

しい事実をもたらすものであり、気候予測の精度の向上に役立てられることが期待される。

今後、地上観測データを2005年まで整備し、静止気象衛星による雲のデータも加味して、より長い期間にわたる雲の出現特性の年々変動から、10年規模の変動を明らかにしていくとしている。